長砂 實／芦田文夫編

ソ連社会主義論

―現状と課題―

大月書店

編者・執筆者紹介

長砂　實　1933年生　関西大学教授
芦田文夫　1934年生　立命館大学教授
田中雄三　1933年生　龍谷大学教授
陶山計介　1950年生　京都大学大学院
中江幸雄　1950年生　京都大学研修員
小野一郎　1928年生　立命館大学教授
岡本　武　1935年生　大阪外国語大学教授
岩林　彪　1941年生　松山商科大学助教授
建林隆喜　1940年生　大阪経済大学教授
上島　武　1935年生　大阪経済大学教授

ソ連社会主義論——現状と課題

1981年3月27日第1刷発行
1983年4月15日第2刷発行

定価2000円

編　者© 長砂　實 / 芦田　文夫

発行者　平　智享

発行所　株式会社　大月書店
〒113 東京都文京区本郷2-11-9
印刷太平印刷
製本中條製本
電話（営業）813-4651（編集）814-2931 振替 東京3-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

木原正雄、長砂實編

現代日本と社会主義経済学

四六判　上下各一七〇〇円

現代日本の現状と当面する民主主義的変革の課題をふまえつつ、現存の社会主義諸国における経済建設の理論と経験を詳細に検討し、社会主義経済学の体系の再構成を試みた労作

斉藤稔著

社会主義経済論序説

四六判　一六〇〇円

現代社会主義の否定的諸現象の克服と先進国型社会主義論の理論化という斬新な問題意識に貫かれた新しい社会主義像、社会主義経済学の探求者積年の研究成果を凝縮した労作

G・ボッファ著

ソ連邦史　全4巻

四六判　各二六〇〇円

十月革命前夜からフルシチョフの解任にいたる激動の半世紀を、リアルな筆致で描く。イタリア共産党機関紙〈ウニタ〉特派員として永らくソ連に駐在した著者による壮大な通史

ソ連社会主義論

現状と課題

長砂　實
芦田文夫　編

大月書店

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　文

本書はソ連社会主義の現状分析を意図したものである。

なぜ、いま、「ソ連社会主義の現状分析」が必要なのか。

第一に、ソ連社会主義を知らずして現代世界を知ることはできない。「激動の八〇年代」はソ連のアフガニスタン軍事介入で幕を開けた。わが国で伝統的に強い「ソ連嫌い」の感情は、いまや頂点に達した感がある。さまざまの「ソ連脅威論」が横行している。だが、このようなときにこそ、客観的かつ総合的にソ連社会主義を理解することが必要なのである。好むと好まざるとにかかわらず、世界で最初の社会主義国となったソ連はすでに六十有余年の歴史をもっている。そのソ連は、世界の政治、経済、軍事、イデオロギー、その他のすべての分野で、強大な力を発揮している。ソ連社会主義の現状を知ることによってはじめて、現代世界の特徴と展望を語ることができるのである。

第二に、ソ連社会主義を知ることによって、かなりの程度、現代社会主義一般をも知ることができる。いうまでもなく、現在では社会主義国は十数ヵ国であり、現代社会主義は多様化している。だから、ソ連を知るだけでは現代社会主義を十分に知ったことにはならない。にもかかわらず、いわゆる「ソ連型」社会主義は、現存する社会主義世界のなかでは圧倒的な「多数派」を形成している。ユーゴスラヴィアを除いて、多くの社会主義国が主要な諸特徴をソ連と共有している。したがって、ソ連社会主義の現状を知る

ことは、かなりの程度、他の社会主義諸国の現状を理解することに通じるのである。

第三に、現代のソ連社会主義を知ることは、われわれにとっての将来の社会主義を構想するうえではなはだ有益である。現存の社会主義諸国の歴史と現状の批判的検討をふまえて、自国の諸条件に適合的な社会主義像を構想しそれへの道を追求する潮流が、現在、国際共産主義運動のなかで発展している。この立場からするソ連社会主義の評価は、通常きわめて辛い。とりわけソ連における消費生活の立ち遅れと社会主義的民主主義の未成熟に強い批判の目が向けられている。しかし、われわれが同時に見逃しえないのは、ソ連社会主義がみずからの根強い後進性の諸要素や諸欠陥とたたかうなかで明らかに一定の成熟をみせており、その結果、高度に発達した資本主義諸国で展望されている将来の社会主義像のいくつかの要素が現代ソ連社会主義において現実のものとなっている、ということである。われわれは「ソ連社会主義の現状分析」をつうじて、否定的要素とともに肯定的要素をも学びとることができるのである。

では、このような現代的意義をもつ「ソ連社会主義の現状分析」はどのようにおこなわれるべきであろうか。一言でいえば、一連の「対立物の統一」的なアスペクトからの総合的なアプローチが必要である。

第一に、ソ連社会主義の発展を、社会主義の一国的発展と世界的発展との統一においてとらえねばならない。十月革命自体が、ロシア資本主義の産物であるとともに、帝国主義段階の世界資本主義の産物でもあった。その後のソ連における社会主義の建設は、社会主義の世界的発展と密接に関連している。資本主義世界はなお強大であり、社会主義世界はまだ「部分」世界にすぎない。したがって、ソ連社会主義の到達・成熟水準は、ソ連にとっての「旧社会」との対比においてだけでなく、世界になお現存している「旧社会」、とりわけ高度に発達した資本主義諸国との対比においても評価されねばならない。一国的発展の視角に一面的にとらわれるとソ連社会主義の到達・成熟水準の過大評価に陥りかねず、逆に、世界的発展

の視角を一面的に強調すると、その過小評価に流れかねない。二つの視角の統一が肝要である。

第二に、ソ連社会主義を、特殊性と一般性との統一においてとらえねばならない。革命前の社会から引きついだ強度の後進性の遺産、一国社会主義建設の国際的諸条件、世界史上初めての社会主義建設、多民族性、経済的、社会的、文化的に不均等に発展した広大な国土、豊かな資源、などに規定された特殊性を、ソ連社会主義はもっている。したがって、ソ連社会主義をそのまま社会主義のモデルとみなすわけにはいかない。だが同時に、ソ連社会主義は社会主義の一般的な基本的諸特徴を実現している。ソ連社会主義の特殊性を一面的に誇張して、あたかもそれには社会主義の一般的本性が欠如しているかのようにみなしてはならない。

第三に、ソ連社会主義を後進性と先進性との統一においてとらえる必要がある。ソ連社会主義のもつ後進性は「旧社会」がもっていた後進性に規定されている。その後進性の克服のためにこれまでに多大の努力がなされたが、現在もなおその完全な克服は達成されていない。とりわけ前述の世界的発展の視角からみれば、そのことは明白である。ソ連は、たとえば、生産力、生産性、生活水準の点では、高度に発達した資本主義諸国に及ばないだけでなく、他の社会主義国たとえばドイツ民主共和国にも及ばない。だが同時に、ソ連社会主義のもつ先進性の諸要素を無視してはならない。それは資本主義の克服としての社会主義が先進性をもっている点にあるだけでなく、世界で最初の社会主義国として無数の新しいものを創出してきた点にもみられる。その先進的な歴史的経験の多くは、その後の社会主義諸国によっても追体験されている。ソ連社会主義がいまもなお抱えている後進性の諸要素に目をつぶることは正しくないが、同時にその先進的な役割を否定したり過小評価することも正しくない。

第四に、ソ連社会主義は、消極性（欠陥、誤り）と積極性（長所、功績）との統一においてとらえられ

ねばならない。ソ連社会主義は、客観的および主観的な諸条件に規定されて、一連の重大な誤りをおかしたし、いまもなおおかしている。たとえば、スターリン主義的諸現象や大国主義的諸現象にそれがみられる。だが同時に、ソ連社会主義が果たしてきた、また現に果たしている積極的役割、その功績を正当に評価しなければならない。十月革命は社会主義世界革命の嚆矢となった。第二次世界大戦におけるソ連の勝利なしには、今日の社会主義世界の形成は考えられない。ソ連社会主義が、いくつかの重大な誤りにもかかわらず、基本的には、世界平和、民族解放、社会進歩の推進者であったことを否定することはできない。ソ連社会主義が弁護しがたい欠陥をもち誤りをおかすことがあっても、その全体像をそれでもって塗りつぶしてはならないのである。

最後に、ソ連社会主義を、生産力と生産関係、土台と上部構造の相互関係にかんする史的唯物論の諸命題にしたがってとらえねばならない。とりわけ、政治と経済の統一の観点からの分析が必要である。従来のソ連社会主義研究においては、ソ連政治の研究とソ連経済の研究とがほとんど交流することなくおこなわれてきた。このことは、ソ連社会主義のトータルな把握を妨げる一因となってきた、といわねばならない。共同研究の発展をつうじてこのような欠陥の克服をはからねばならない。

では、ソ連社会主義の歴史的到達点はどのように規定すべきであろうか。以上に述べたような問題意識と方法によって「ソ連社会主義の現状分析」をおこなった結果として、われわれがほぼ共通してもっている結論は次のとおりである。

周知のように、ソ連はみずからの現発展段階を「発達した社会主義社会」と規定している。その含意は、ソ連はすでに資本主義社会から共産主義社会への過渡期を終えて共産主義社会の第一段階としての社会主義であるだけでなく、そのような社会主義の初期段階としての「発達した社会主義社会の建設期」もすで

に終えて、いまや共産主義社会の高度な段階としての共産主義への直接的移行の時期にはいっている、ということである。そのさい論拠とされるのは、一九三〇年代後半に基本的に建設された当時のソ連社会主義にくらべて、今日の七〇～八〇年代のソ連社会主義が質的にも量的にも格段の発展・成熟をみせている、ということである。たしかに一国的発展の視角からすればソ連社会主義のそのような発展・成熟は認めなければならない。だが、社会主義の世界的発展の視角からすれば、「発達した社会主義社会」論は、あきらかに、ソ連社会主義の成熟度の過大評価である。なぜならソ連社会主義は、現存する高度に発達した資本主義の尺度をもってするならば、みずからの「旧社会」の発達水準に制約された後進性の諸要素をまだ克服していないからである。資本主義にたいして社会主義が有している本来的な優位性を、現存する資本主義との対比において議論の余地がないほど明白にソ連社会主義が示しえたときにこそ、ソ連社会主義はみずからを「発達した社会主義社会」と称する資格を獲得するのである。そのときに初めて、ソ連における共産主義建設の展望は、高度に発達した資本主義国の人々にとっても説得的なものとなる。ソ連社会主義が「発達した社会主義社会」であるという規定は、現状にマッチしない時期尚早なものといわざるをえない。

他方で、ソ連社会主義を「前期的社会主義」と規定したり、発展途上国における「非資本主義的発展の道」、あるいは「原初（プロト）社会主義」と規定する見解が、わが国の内外にある。要するに、ソ連社会主義の一国的性格、特殊性、後進性、消極性といった諸要素を一面的に強調して、その世界的性格、一般性、先進性、積極性の諸要素を正当に評価しない立場からする規定である。われわれがこれに同意できないことは、すでに述べたところから明らかであろう。

ほかに、ソ連社会主義の現発展段階を、現代社会主義は「世界史的には生成期にある社会主義である」

という規定のなかにふくめて理解しようとする見解が、近年、わが国で有力におこなわれている。たしかにソ連社会主義をふくむ現代社会主義は、全体としてみた場合、「世界史的生成期」にある。このような規定はまた、現存社会主義の限界や欠陥を強調して、それがわれわれにとって社会主義のモデルとはみなしえないことを示す点では有益である。しかし同時に、ソ連社会主義の現在の発展段階の特徴づけをこのような一般的規定によってつくすことができないことも明らかである。現代社会主義は、発展段階を大きく異にする国々から成っている。

われわれの見解では、ソ連はすでに資本主義社会から共産主義社会への過渡期を終えて共産主義社会の第一段階としての社会主義ではあるが、後進性の諸要素をなお強く残した、成熟・発達しつつある社会主義、いいかえれば、成熟・発達した社会主義にいまようやくさしかかろうとしている社会主義である。

本書は、かつて『現代日本と社会主義経済学』上・下巻（大月書店、一九七六年）をあらわした研究グループによるその後の共同研究の成果である。われわれの多くは依然として社会主義経済学の理論的諸問題に強い関心をよせている。だが、われわれはこの「ソ連社会主義の現状分析」と取り組むなかで、意識的に、われわれにとって新しい分野の開拓につとめた。その成果がどのようなものであるかは、読者の評価に待つほかない。

この三月をもって、われわれの恩師木原正雄先生が京都大学を定年退職される。わが国におけるソ連社会主義研究のすぐれた先達である木原先生がいつまでもお元気に活躍されることを祈念して、本書を先生に捧げるものである。

一九八一年一月

編　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

第一章　生産の社会化と社会主義的所有……芦田文夫…一九
第一節　「生産の社会化」概念をめぐって……一九
全一的な「国家的所有」にたいする批判 19　社会主義的所有論の展開 21　「生産の社会化」22
第二節　「工業化」と生産の社会化……二四
ロシアの後進性 24　一国社会主義と集権的蓄積方式 26　「在来型重工業」への傾斜と高い集積水準 27　専門化水準の遅れと「万能型企業」29　世界第二位の工業国へ 30
第三節　「経済改革」と生産の社会化……三三
「下からの社会化」32　「効率化」と企業の「自主性」34　「経済改革」の制約と企業の自己蓄積 35
第四節　現段階での生産の社会化水準……三六
現代的な産業部門構造の課題 36　世界最高の集積水準 37　専門化水準の立ち遅れ 39　部門専門化の水準 41　企業の製品別専門化の水準 42　企業の部品別専門化の水準 43　企業の技術工程専門化の水準 45　部品別専門化と技術工程専門化の課題 46
第五節　「生産合同」と生産の社会化……四六
単一工場型から多数工場型へ 46　専門化・協業化と投資の総合性・

大規模化 48　「経済的自主性」 49
第六節　生産の社会化と社会主義的所有 ……五一
所有展開のモメント 51　ソ連における展開過程の特徴 52　社会化の展開と所有 53　社会化水準の後進性による制約 55
第二章　生産発展水準と経済効率 ……田中雄三…六〇
第一節　生産発展の成果と課題 ……六〇
生産力の到達水準 60　統計数字をめぐる若干の問題 63　成長率の急速な低下 64　質的・構造的側面における困難 67　改善への二大障害 70
第二節　経済効率の概念と指標 ……七一
効率指標をめぐる経過 72　総合指標論の三前提 73　投入と産出の構成要素 77　総合的効率指標の三形式 79　効率指標の用途 80　経済的刺激制度との関連 82
第三章　経済管理と計画化方式 ……八九
はじめに ……陶山計介…八九
第一節　六〇～七〇年代における経済管理・計画化の改革過程 ……九〇
1　「三〇年代型経済管理方式」とその欠陥 ……九〇
中央集権的な指令主義的管理方式 90　その欠陥――改革の必然性 91

2　経済改革の展開と到達点……九二
六五年改革 92　七一年改革――計画化と経済的刺激の改善 93　七三年改革――経済管理機構の改善 95　経済管理改善の現状と課題 96
七九年七月決定の意義 98

第二節　今日の経済管理システム……九九
1　計画指標体系の改革……九九
承認計画指標の数と内容 99　その特徴と効率向上 100　企業活動評価指標と質の向上 101
2　ホズラスチョートの発展と経済的刺激メカニズム……一〇三
経済的刺激フォンド 103　安定的利潤配分 104　ホズラスチョートの発展と質・効率 106
3　経済管理機構の改善と管理参加……一〇八
二～三環制管理システムの展開 108　省・工業合同と生産合同 110　勤労者の管理参加と民主化の課題 114

第三節　今日の社会・経済計画化プロセス……中江幸雄……一一六
1　経常計画化……一一七
経常計画化の諸欠陥 118　資源配分方式の改善方向 120
2　展望計画化……一二

計画システム121　科学・技術進歩の計画化122　五ヵ年計画の編成プロセス124　計画編成過程分析の結論127

3　展望計画化の改善方向……二二八

計画化作業の拡充128　目的別プログラム方法129　計画計算自動システム129　総合計画化システム130

第四章　労働の普遍性と就業・労働条件……小野一郎…二三五

第一節　完全就業と労働力配置……二三六

労働の普遍性と完全就業136　失業問題の解消137　完全就業と合理的労働力利用138　人口動態と労働力バランス139　就業の部門構造141　労働力配置と人口移動142　労働力の流動性143　労働力の流動性と生活・労働・職業145

第二節　労働条件改善と労働時間・労働環境……二四七

労働の普遍性と労働条件147　労働時間の短縮148　自由時間・有給休暇・労働外時間149　余暇利用と個人の発達151　労働条件改善と科学・技術進歩152　労働環境と労働保護154

第三節　婦人労働と就業・労働条件……二五六

労働の普遍性と婦人の就業156　婦人の就業の拡大と男女平等157　婦人労働と母性保護159　婦人労働と家事・育児160

第五章　経営間協業と農工統合……岡本　武…一六五
はじめに……一六五
第一節　農業における専門化・集積過程の進展と経営間協業の形成……一六八
専門化と集積の進展 168　専門化水準 169　集積過程とその水準 171　集約化水準 173　経営間協業の必然性と特質 175　より高い協業形態＝農工統合へ 176
第二節　経営間協業と農工統合の生産組織形態とその特徴……一七八
経営間協業の諸形態 178　経営間協業の生産組織形態 179　農工統合にもとづく生産組織諸形態 183　地域的農工複合体の形成へ 185
第三節　経営間協業と農工統合の実態……一八七
経営間生産組織体の発展過程と現状 187　経営間生産組織体の実態 191　農工統合にもとづく生産組織体の実態 194　農工生産組織体の新しい発展方向 196　社会・経済的な結果と課題 198
第六章　貿易と産業協力……二〇五
第一節　ソ連貿易の現状……岩林　彪…二〇五
経済建設と対外経済関係 205　ソ連貿易の位置 207　国グループ別構造 208　商品グループ別構造 210
第二節　コメコン経済統合とソ連の位置……二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com